

中世における古楽の黎明と開花

080823

≡ Program ≡

中世のヨーロッパ音楽史において、その原点を辿ると教会の典礼聖歌に到達します。

この典礼聖歌は西洋文明の至宝のひとつと評価され、16世紀までの全西洋音楽の中で大きな存在感を示してきました。

しかし、この典礼聖歌は儀式的の目的のために歌われたもので、純粹に音楽と見るのは誤りであるとの指摘もありますが、単旋律で歌われる素朴な歌唱は聴く人を魅了いたします。

また、永年にわたり創作された典礼聖歌には名曲として、また、ルネッサンス時代以来、多くの作曲家達の創作のよりどころとなった楽曲も数多くあります。

今日は、中世ヨーロッパ音楽の出発点といわれるローマ・カトリック教会の典礼聖歌を、初めにお聴きいただきます

次に、皆様ご存知のように、ヨーロッパ音楽史におきまして、ルネッサンス・バロック期を迎え、古楽は飛躍的な発展を遂げました。そして、開花いたしました。

そこで、バロック時代の両巨匠の数多い名曲の中からヘンデルの「組曲、王宮の花火の音楽」、そしてバッハの「トッカータとフーガ、二短調」を素晴らしい音響空間でご鑑賞ください。

~~ ㊦㊦㊦ ~~

■ グレゴリオ聖歌

演奏時間 約17分

- ・ シオンよ、たたえよ
- ・ われら神なる御身をたたえ
- ・ われは御身を敬虔にあがめ

聖モーリス & 聖モール修道院 ベネディクト派修道士聖歌隊 1959年10月収録

ゲオルク・フリードリッヒ・ヘンデル(1685~1759)

■ 組曲 王宮の花火の音楽

演奏時間 約17分

カール・ミュンヒンガー指揮 シュトゥットガルト室内楽団 1981年5月収録

ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685~1750)

■ トッカータとフーガ 二短調 BWV565

演奏時間 約10分

ジェームス・パーソンズ(オルガン)

- ()
- 参考文献 新西洋音楽史(上) D.J.グラウト他 音楽之友社 1998.5 発行
 - 古楽のすすめ 金沢 正剛 音楽之友社 1998.8 発行